

発達に課題のある幼児の集団への適応に関する実践的研究（2）

— 年中児クラスにおける個別指導と園内カンファレンスを通して —

久原 有貴 七木田 敦 大野 歩 松本 信吾
林 よし恵 田中 恵子 関口 道彦 落合さゆり
(研究協力者) 金子 嘉秀

I. はじめに

わが国においては発達障害者支援法の施行や特別支援教育の開始を背景に、障害のある子どもに対する支援が進んできている。このような動向は学齢期の諸学校だけでなく、地域の幼稚園や保育所にも及んでおり、個別の指導計画の作成や園内体制の構築、または自治体による巡回相談の展開など、園内外の支援体制の充実が急務となっている（文部科学省、2010）。障害等のある幼児の多くが地域の幼稚園・保育所に通うようになってきている現在、各園においては入園から卒園に至るまでの各時期で、どのような支援を展開させていくかという問題は、喫緊の課題となっている。

発達に課題のある幼児が、いわゆる通常の設定で保育を受けることについては、これまで言語や社会性などの発達面にポジティブな結果がもたらされるとして、肯定的に受容されてきた。しかし、支援の内容が不十分の場合は、集団生活の場である保育からの恩恵を最大限に受けることは難しく、逆に幼児や保護者に対する否定的な影響も否定できない。これらの課題を解決するためにも、入園初期から、保育に関わる職員すべてがこのような子どもたちの園生活への適応を支援していくことが必要である。

園生活への適応支援に関する先行研究では、自閉的傾向のある幼児が園環境に適応していく過程をルーチン活動場面に注目しながら明らかにしたもの（松井、2002）、また広汎性発達障害児の園生活への適応過程について集団への適応を中心に分析したもの（水口・小磯・小阪、2007）が挙げられる。ともに、適応過程の分析を通して、それに基づいた支援のあり方を議論している。ただし多様な環境から構成される園生活においては、幼児の適応に影響を与える要因は複数に及ぶ。また、園生活への適応と言う場合、単純に幼児が

活動に順応している姿だけを見ればいいというものでもない。つまり、声かけや環境調整などを行う保育者の考え方や、幼児自身が能動的に園環境に関わっていくプロセス（菅田、2006）も明らかにする必要があると考える。これを踏まえれば、幼児の適応過程を検討する際に、先行研究における単一場面での幼児の姿にのみ焦点を当てた分析では不十分と考えられる。松井（2007）は幼稚園保育所での支援体制整備の問題を解決するために、園単位で支援システムを構築していく必要性を述べ、「アセスメント・カンファレンス・実践」からなる「園内体制支援システム」の必要性を説いている。特に「園外の専門家（例えば、当該幼児の療育機関の者・巡回相談員・大学関係者など）がいかに関与することができるか」を一つの課題として挙げている。

近年、保育現場において、子どもの理解や保育の方法を議論する場として、保育カンファレンスが注目されている。これはもともと医学や臨床心理学の分野で行われてきた「カンファレンス」を応用したもので、保育者を中心に子どもの保育に携わる関係者によって実施されている。その効果としては、多くの保育者と意見交換できることによる子ども理解の促進、保育活動や子どもに対する接し方の省察が指摘されている。つまり、保育カンファレンスには、子どもの理解や支援の検討にあたり、グループダイナミクスによる効果が期待できるといえよう。

そこで本論では、幼稚園で行われている保育カンファレンスに、園外の専門家が協働することによって、障害のある幼児の集団適応支援を検討した実践事例を報告する。また発達に課題を抱える園児の集団適応を支援するためのカンファレンスの意義やあり方について、検討することを目的とする。

Yuki Kuhara, Atsushi Nanakida, Ayumi Ohno, Shingo Matsumoto, Yoshie Hayashi, Keiko Tanaka, Michihiko Sekiguchi, Sayuri Ochiai, Yoshihide Kaneko: A practical study on the adaptation of a child with special needs to the peer group in the kindergarten.

Ⅱ. 対象と方法

1. 対 象

本研究は、前年度の観察対象者を継続して観察するという観点から、前年度の研究において年少児クラスに在籍し、本年度は年中児クラスに進級し、4歳になった男児A（以下A児）を対象児とする。A児は、入園以前より、認知・行動の発達面での遅れが見られ、B市内の医療・養育機関に通っていた。簡単な他者の指示による言語理解は可能であり、1・2語文程度の発語はあるものの、全体としてみれば構音が未熟で他者が聞き取りづらい場面も見受けられた。また、運動に関して粗大運動などでぎこちない部分があった。

前年度の年少児クラスにおける保育実践、およびカンファレンスにおいては、園の生活にも一通り慣れ、他児とのかかわりが増えるに従い、叩く・奪うなどの行動が見られるようになったため、これらの行動がどのような条件下で発現することが多いかについて、観察が重ねられた。そして、他の園児にも配慮した保育者の対応が話し合われるとともに、A児の良さである「人とかかわることが好き」という特性などを活かし、集団に溶け込めるような働きかけが行われてきた。

2. 支援体制

A児の在籍するF幼稚園は、広島県下であり、年少児・年中児・年長児クラスをそれぞれ一クラスずつ有している。F幼稚園内の支援体制については、前年度はA児に個人的に加配教諭を配置していたが、今年度当初はA児一人につき加配教諭はおらず、担任・副担任を中心にA児が集団の中に入れるように支援していきながら、フリーの保育者も出来る限りA児のサポートを行う体制であった。また、A児に関する個別記録は担任・副担任・フリーの保育者により定期的に記述されている。さらに、特別支援コーディネーターが大学側と連携を図り、大学教員・院生を招いた園内カンファレンスが行われている。

3. カンファレンスの概要

カンファレンスは、前年度から継続して幼稚園の保育者、大学教員・院生によって行われた。カンファレンスに際して、幼稚園側は実践の中で得られたA児に関する保育記録、大学側は事前観察による資料（映像を含む）を提示し、カンファレンスの資料とした。それらをもとに、疑問や意見等を出し合い、支援の方向性を決め、実践を行うようにした。なお、カンファレンスには年中児クラスの担任・副担任のみならず、他のクラスの担任・副園長・養護教諭など可能な限り全教諭が参加し、多角的に検討が加えられるように所見

の交換を行った。カンファレンスは1カ月あたり約1回、約1時間程度を目途に、定期的で開催された。

なお、本年度のカンファレンス開催日程は5月27日、7月7日、9月16日、9月29日、11月17日、12月8日の計六回であった。

ただし、9月29日のカンファレンスは療育機関の専門家も参加して行われた。

3. 方 法

本論ではまず、上記の六回にわたり行われたカンファレンスで期間を区切り、カンファレンスまでに見られたA児の他児とのかかわり、集団適応に関する場面を紹介しつつ、カンファレンスで行われた議論を整理し、概観する。

そして、「A児の集団適応」という課題に関して、カンファレンスや保育実践を介して、A児にどのような変容をもたらしたかを考察するとともに、今後のA児の支援・カンファレンスの課題を探るものである。

Ⅲ. A児の他の園児とのかかわりとカンファレンス

— A児の複眼視的理解に基づく実践に向けて —

1. 第一回カンファレンス（5月27日）

4月にはA児は年中児クラスに進級して、保育室が移動し、また年中からの新入園児も新たに十数名がクラスに加わったことから、不安になる姿も見られていた。

また前年度より、他者のものに興味をもち、遊具を取ったり弁当のおかずを取って食べたりすることが問題として挙げられたA児であったが、進級まもない本時期も、遊具の貸し借りの場面や昼食時などに、他児のものを無言で執拗に取ろうとする、突然叩く、蹴るなどの行動を起こすことが多く見られた。その結果として、他児の間にA児を避ける行動や雰囲気があることが報告された。

一方、集いの場面では他児との触れあいを楽しんだり、集団遊びの場面では期待をもって参加したりするA児の姿がたびたび見られることも報告された。その姿が次に示すエピソード①の姿である。

【エピソード①】

5月下旬。遊びの中でペアを作る場面でA児は大好きなB子とペアになろうとB子を目がけて行く。しかしB子はすでにC子とペアになっていた。A児はC子を押しつけてB子と手をつなぐ。C子は諦め、B子は困惑した表情をするが、A児は嬉しそうな顔をしていた。その後、ペアでジャンケンをして列車になって遊ぶ場面では、A児は友だちと出会ってジャンケンすることは喜ぶが、

ジャンケンに負けると「後ろにつく」ことは嫌がり、その場に座り込んで動かなくなった。

クラスにおける集団遊びでは、ルールのある中で「友だちと一緒に楽しさを共有する」という保育者のねらいがあった。A児は年中児クラスに進級した当初から他児と一緒に遊ぶことには興味をもっていたが、自分の思い通りにしたい気持ちが強く、他児とのかかわりがうまくもてないことも多かった。

そこで、カンファレンスにおいて今後の支援の方向性が話し合われた。集団遊びでは、その楽しさを理解し共有することで、他児に対するA児の不快行動は減り、また他児の意識も変わっていくのではないかと提案があった。また突発的に行われる「叩く、取る」といった行動についても、「A児の箸が他児のお弁当に伸びる時の雰囲気は感じ取れる」との意見や、「突拍子がないように見えるが、彼なりの理由があるように見受けられる」との意見があったため、今後はA児の「叩く」「弁当を取る」といった行動の文脈や条件を、ビデオカメラを用いた観察を中心として、探っていくこととなった。

2. 第二回カンファレンス（7月7日）

この時期にも、集いの中で突然他児を叩くなどの行動が見られることが多かった。また、他児が使っているものが欲しい時に、それを強引に奪おうとするといういざこざが頻繁に見られた。

それが原因で、他児は、使っているものをA児に奪われると、すぐに諦めて違う遊びをするようになっていくということが報告された。

【エピソード②】

女児3名が室内でままごと遊びをしている。

A児は料理をしているD子の様子をのぞき込み、無言で突然おかずに見立てていた積み木を取ろうとした。D子が「やめて」と言ったがA児はやめず、自分のフライパンに黙々とそれを入れ続けた。D子は「やめて」と泣き、「もう一緒にしない」と去っていったが、A児は気にせず、そのまま遊びを続けていた。

これらの姿を受け、カンファレンスでは「他児の使っているものを取る」という場面において、保育者が仲介に入り、A児と他児が思いを伝え合えるように支援していくことが望ましいという意見や、他児がA児に何かを伝えようとしていることにA児が気づくように支援していくことが必要だという意見が出された。ま

た大学研究者より、保育者が阻止して他児のものを取らなかった場合に、誉められるなどの成功体験をさせていくのはどうか、その場合「即時強化」の観点から、その場その場で誉めるべきではないか、という意見も出された。

また、朝のルーティンワーク（シール貼り・タオルかけなど）において気持ちが乗らず、長い時間がかかることがあった。このことで、自由に遊ぶ時間が減り、満足するまで遊べない、だからA児の中に「集いに参加するよりも遊んでいたい」という思いが生まれるのではないかと考えられた。そこでA児にとって理解しやすい、直線的で分かりやすいルーティンならスムーズに行われるのではないかと意見が出された。

さらに、保育者には「友だちと一緒に集うことの楽しさを感じて欲しい」という思いがあったため、集いにはA児を強引に参加させる体制がとられていたが、それが、A児にとっては負担になっているのではないかとこの観点も提出された。

3. 第三回（9月16日）および第四回（9月29日）カンファレンス

第三回のカンファレンスはこれまで通りの形で行った。第四回にはA児が通っている療育機関の専門家も招いて、観察およびカンファレンスを行った。

第二回カンファレンスを受けて、集いの時間にA児を強引に誘うのではなく、誘いの声をかけながら、A児が自分から「集いに参加したい」という気持ちになるようにかかわっていた。行動が制限されることが少なくなったためか、以前見られたような「衝動的に理由もなく他児を叩く」という姿はほとんど見られなくなった。しかし一方で、集いの内容が自分のやりたい活動の時には参加するが、やりたくない時（特に制作やクラスでの話し合い）には参加せずに部屋を出て行くことが増えた。

それを観察した療育機関の専門家より、「現時点では少なくとも集いの最初と最後には居ることで、学級集団に「参加」している意識を育むようにしていく」ことが提案された。また、他児とのかかわりにおいては、A児に指導する際、禁止の指示や条件提示にA児がうなずいていても、理解につながっていない場合があるとの指摘もなされ、「短い言葉で分かりやすく伝えるようにすること」や「職員間でA児に伝えるルールを共通化すること」が共通認識された。

第四回のカンファレンスの最大の特徴は、療育機関の専門家も招いて合同でカンファレンスを行った点である。幼稚園および療育機関関係者の共通認識は、家庭でのA児の様子が見えてこないという、家庭との連

携に関するものであった。このため、今後さらに保護者との信頼関係を向上していきたいということが話し合われた。

4. 第五回カンファレンス（11月17日）

これまでのカンファレンスによる話し合いから、保育者はA児の「取ろうとした行為」を叱るだけではなく、取ろうとすることを保育者が制止し、結果「取らなかった」場合は、「取らなかったこと」を認めて誉めたり、「見たかったら見せてって言うんよ」とA児に促したりすることを繰り返し働きかけてきた。10月以降になると、A児が他児のものを勝手に取ろうとする頻度は減少したように感じられた。

【エピソード③】

A児は隣に座ったE子の弁当を覗き込む。弁当に顔が付いてしまいそうなほど前屈みになっていて、E子は「も～Aくん…」と困惑気味。保育者が「Aくん、見せてって言った？」と聞くとA児は「みーせーて」とE子に言う。E子は「いいよ」と言い、A児に弁当箱を渡す。A児はじっくり眺めた後「これ何？」「どこで買った？」など質問をし、E子も笑顔でそれに答えた。

このエピソードのように、A児は少しずつ他児との適切なかかわり方を学び、他児もA児の思いを受け入れることができるようになっていった。

その理由としては、日々の生活を通して他児がA児を受け入れられるようになったこと、A児も他児と一緒に過ごすことに楽しさを感じられるようになっていったことに加え、保育者の介入によりA児の言語表現が増え、適切なやりとりができるようになってきたことが考えられるという意見が出された。

11月の大学側の観察においても、他児の黄色いカバンに対する強い関心をもつA児が、言葉を用いて「貸して」→「いいよ」という、依頼と応諾の過程を経てから借りることができた姿が報告された。

また集いの場面において、A児は、11月ごろから集団遊びだけでなく、みんなで一緒に集うこと自体への期待をもち、その雰囲気を楽しむようになった。

【エピソード④】

自由遊びの時間の後、保育室で輪になって椅子に座っている。片付け、トイレ、手洗いに時間がかかり、A児は少し遅れて集いに参加した。そのとき保育者はどんな遊びをしたかを子どもたちに尋ねる、「遊びの共有」の時間をもっていた。保

育者が「今日何をして遊んだかお知らせしたい人」と訊くと、子どもたちはそれに答えようと、競うように手を挙げた。その日のA児は、自分のした遊びを他児に教えることには関心が無かったのか、手を挙げることはなかった。保育者がF男を指名し、F男が答えると、それに反応してG男が前に向かってジャンプをし、前のめりになるようにして床に手をつく、いわゆる「コケ」をした。それ以外の子どももそれに触発されて同じような反応をした。A児はそれを見て、ジャンプをするような勢いはないが、ゆっくりと前に突っ伏すようにして、床に手をついた。

エピソード④のような集いにおける、他児の発言や行動に反応して「コケる」という「ふざけ」の伝播は、年度当初からよく起こっていた。「コケる」という反応が、その全体の活動の文脈において適切とは限らないことも多いが、楽しい雰囲気を子ども同士で共有できるため、保育者は制止してこなかった。

A児に関して言えば、7月ごろには興味がない時は立ち上がり席を離れたり、寝転がったりするなど、集いの「面白み」を楽しむような場面は少なく、そうした「ふざけ」に参加することも、このエピソード④の日が初めてであった。

これは、A児自身が年少児クラスの時よりも「友だちとかかわりたい」という思いを強くもつようになってきたことや、集団遊びの場面において、A児が他児と楽しい雰囲気を共有できるようにするための工夫をしてきた積み重ねがあるように思われる。それが、A児自身が集団の楽しい雰囲気を感じ取りそこに参加したいと動機づけられることにつながったと考えられる。

5. 第六回カンファレンス（12月8日）

集いや集団遊びなどにおいて、見通しをもち、ルールを守って遊ぶ楽しさを実感していると感じられる場面が観察期間を通して数回見られた。集団遊びを繰り返す中で、A児自身が他児と一緒に遊ぶことの楽しさをしっかり感じるようになってきた。

【エピソード⑤】

クラスでかくれんぼが流行りだした。A児のみならず、クラス全員がかくれんぼの楽しさを感じ、毎日のかくれんぼをして遊んだ。A児は隠れることが好きで、友だちと一緒に身を潜めたり、「しー」と言いながら互いに見つめ合ったりと、同じ気持ちを感じながら遊んでいた。また鬼役の友だちに見つかけられると、A児は「見つかったー」

と言いながら、集合場所に出てきた。

エピソード⑤のような体験により得られる「一緒に遊ぶ楽しさの実感」は、自分の思い通りにすることで得られるのではなく、他児と思いを共有することで得られていくと考えられる。A児が、「友だちともっとかかわりたい」、「一緒に遊びたい」という思いをもつためにも、このような経験を積み重ねることが大事であることが話し合われた。

ただし、エピソード⑤のようにまわりの子どもとの言葉によるコミュニケーションの楽しさを知り、これが増した一方で、他児に「やめて」と言われても、叩く・引っ張るなどをやめないといった自分の主張を優先する行動も引き続き散見された。これについては、A児に対して思いを伝えることが無意味であると他児に思わせないようにするため、また、他児の主張は無視してもよいものであるとA児が思わないようにするために、保育者による早期の介入を行うことで意見がまとまった。

V. 総合考察と今後の展望

ここまで、本年度のカンファレンスまでに見られたA児の他児とのかかわり、集団適応に関する場面を紹介しつつ、カンファレンスで行われた議論を整理し、概観した。

幼稚園、保育所単位の支援における外部参加者の関与の重要性は、既に松井（2007）により指摘されているところである。本年度のカンファレンスには、昨年度と同様に大学関係者が参加したことに加えて、療育機関の専門家も参加したことに大きな意味があったと考えられる。昨年度より継続して、幼稚園全職員と大学側の関係者が参加するカンファレンスを行ったことで、A児の現状の認識と課題の共有が図られた。本年度はそれに加え、療育機関の専門家がカンファレンスに参加することで、互いに情報を交換したり、意見を出し合ったりする機会となり、より多角的な視点でA児の集団適応について捉えたり支援を考えたりすることが可能となった。

一方、外部参加者の観察の回数が少なく、カンファレンスの際に保育者との間でA児の姿についての認識が食い違うことがあるという課題も見いだされた。支援の方向性を考える上では、対象児についての認識を共有することが重要であるため、観察の頻度を増やしたり、対象児の普段の様子が見えるようなビデオ映像を使用したりといった工夫が必要であると考えられる。

A児の集団適応、他児とのかかわりにおいては、6回のカンファレンスを行いながら、保育実践を工夫し

てきたことにより、効果が見られたと考えられる。

例えば、他者のものに興味がある場合に、「何も言わずにとる」行為を制止し、「見せてーいいよ」、「貸してーいいよ」という短い会話スキットを根気強く指導・強化した事が、エピソード③に見られるような、他児との軋轢を生まない、より円滑なコミュニケーション手段の獲得につながったと考えられる。

また、他児がA児に対して拒否的な見方をしている傾向がある時期に、保育者がA児と他児との間に入り、互いの思いが伝えられるような支援をしたり、言葉がうまく出てこないA児の思いを保育者が代弁して伝えたりしてきたことで、他児が「A児にも思いがあっとうしているんじゃないか」と感じ取り、A児の言動を自然に受け入れることができるようになったり、逆に自分の思いをきちんと丁寧に伝えることができるようになったりした。これは保育者が、他児とA児がかかわる場面を丁寧に支えてきたことにより、他児がA児を仲間として自然に受け入れようとする雰囲気や育まれてきたからと考えられる。さらに、円滑な友だち関係が育まれてきたことにより、集団への参加や他児とのかかわりに対するA児の期待が少しずつ膨らんできていると考えられることも成果として挙げられる。

今後の課題として、引き続き、園と外部参加者が密接に連携したカンファレンスを行っていくことが必要であろう。本年度、課題として挙げられた「対象児の認識の共有」をさらに深めていく体制作りを模索していきたい。また、A児は来年度年長児となることから、進学準備に向けた支援や進学先である小学校との連携についても視野に入れ、支援のあり方を考えていく必要性があると考えられる。

引用文献

- 管田貴子（2006）「外国籍幼児の保育所への適応過程に関する研究—留学生家族の子どもの事例から見えてくるもの—」『保育学研究』第44巻第2号、104—113.
- 松井剛太（2002）「統合保育場面における障害児の適応—自閉的傾向のある幼児のルーチン活動を中心に—」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』第48巻第1号、535—540.
- 松井剛太（2007）「発達障害のある幼児の理解と支援を促す保育カンファレンス—フォーカス・グループ・インタビュー（FGI）の実施から—」『発達障害研究』第29巻第3号、185—192. 2007年7月
- 水口崇・小磯真由美・小阪徹（2007）「広汎性発達障害児におけるクラス集団への適応過程—いわき短期大学付属幼稚園と共同で行った入園時以降の横断的

研究』『いわき短期大学研究紀要』第40巻, 1-8.
文部科学省 (2010) 「平成21年度特別支援教育体制整備状況調査」

http://www.mext.go.jp/component/a-menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2010/05/20/1294053_1.pdf (情報取得2012/1/3)